# 闘争のエチカ

蓮實重彦
hasumi shigehiko
柄谷行人
karatani kōjin

河出書房新社

# 闘争のエチカ

蓮實重彦 柄谷行人

karatani kōjin

河出書房新社

**蓮實重彦**（はすみ・しげひこ）
批評家。一九三六年東京生まれ。東京大学卒。著書に『批評、あるいは仮死の祭典』、『監督小津安二郎』、『物語批判序説』など。

**柄谷行人**（からたに・こうじん）
批評家。一九四一年兵庫生まれ。東京大学卒。著書に『マルクスその可能性の中心』、『意味という病』、『探究』など。


# 闘争のエチカ

一九八八年五月二〇日　初版印刷
一九八八年五月三一日　初版発行

著　者　蓮實重彦
　　柄谷行人
装幀者　菊地信義
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　〇三―四〇四―一二〇一（営業）
　　〇三―四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印　刷　暁印刷株式会社
製　本　小泉製本株式会社



© 1988 Printed in Japan



定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえします
ISBN4-309-00508-x

目次

はじめに——9

# 1 ポスト・モダンという神話

《近代の超克》とポスト・モダニズム——17
「他者」の存在しない「日本」——29
言語と思考の根源とは——39
現在の批評の何を批判すべきか——49
今、美と倫理について語るとは——60
ポスト・モダン論における反動性——69
小説の《小説》性とは何か——82
小説の現在と物語——92

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

## 2 情報・コミュニケーション空間の政治学

《東京》対《日本》という闘争——117
都市空間の彼方に何があるか——125
現在と《闘争》の露呈——135
文芸批評が錯誤するもの——143
戦後文学と共同体的倫理——150
《闘争》と共同体の空間——167

## 3 終焉とエクソダス

歴史／倫理／主体という主題——181
人生と倫理と批評——194
《世界》を見出す視線——206
《神》と思考のリアリティ——218
権力と国家——224
境界とは何か——230
批評の初源へむかって——241

おわりに——257

# 闘争のエチカ

# はじめに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

私は、テレビやビデオを別にすると、めったに映画を見ないし、映画について語る気もないのですが、先日二本の映画を見て、珍しくものを言いたくなったのです。ベルトリッチの『ラスト・エンペラー』と、ヴェンダースの『ベルリン・天使の詩』です。私は、この監督たちの作品をろくに知りませんから、作家論などできないし、また批評家である貴兄から見れば、見当はずれでしかないかもしれません。ただ、他のなにものでもなく、これらの映画について語りたいという気分に従って、書きはじめることにします。

ヴィム・ヴェンダースの『ベルリン・天使の詩』は、天使が人間の女に恋して人間になるという話です。物語としては、古いパターンですが、ただこの天使たちは、ベルリンという都市の人々を見守ってきて、しかもベルリンがナチズムとスターリニズムのもとで荒廃するにいたるまで、幾度も無力でしかなかった天使たちなのです。つまり、天使として描かれているけれども、彼らは、ある種の人間のことだといってよい。それは、実践家ではなく、認識者であり、どんな人間的実践にも物語にも幻滅したがゆえに二度とそれに加担することなく、ただ実践が何も生み出さないことを確認するためだけに生きているというようなタイプの認識者なのです。

天使たちには、地上の人々がどこにいようが見えるし、彼らの内心の声がすべて聞こえます。しかし、天使たち自身は、何も「経験」しないし、「知覚」しない。彼らが把握するのは、いわば「形式」だけな

のです。彼らは、人間の歴史をずっと見てきているが、一度も生きたことがない。さらに、彼らにとって、歴史は、たんに形式の変形でしかなく、なにごとにもそこでは起こらない。つまり、歴史が存在しないのです。映画では、彼らの世界はモノクロームで描かれており、主人公の天使ダミエルが人間になったとたんにカラーに転じるようになっています。たとえば、彼は、自分の流した血を見て、はじめて色彩を経験するのです。むろん、色彩は一つの例です。それは、私の言葉でいえば、「形式」の外部を経験するということです。

天使ダミエルは、人間になろうとします。それは、天使たることの放棄であり、有限で一回的な世界に生きることです。他者（女）を愛したとき、天使は人間になる。つまり、人間になるとは、他者を見出すことです。そのとたんに、彼は前方が見えない世界のなかで生きはじめる。それはいわば「暗闇のなかでの跳躍」です。天使たることとは、何たる隔たりでしょうか。にもかかわらず、天使たちは、人間になることを欲するのです。それは、「外部」を欲するということです。道徳の、つまり善悪の彼岸にいた天使は、ここではじめて倫理的であろうとするのです。

ベルリンは歴史的な場所です。天使たちはなにひとつこの歴史に介入しえなかったのです。ベルトリッチの『ラスト・エンペラー』についても、いくらかの留保が必要ですが、似たようなことがいえると思います。むろん、主人公の溥儀は、天使ではなく、実在の人物です。そして、この映画を史実として見ると、滑稽であり、腹立たしいものです。たとえば、この映画を西洋人が見る場合のことを考えると、嫌な気がします。そもそも、満州国は、坂本龍一扮する甘粕正彦大尉に代表されるほどにちょろいものではなかった。第一、ここにナチスから逃れたユダヤ人が何万人もやってきているのです。一方、ピーター・オトゥール扮するイギリス人の家庭教師は、啓蒙的で民主的ですが、西洋をこの男一人に代表させるのは不当です。清朝を滅ぼしたのは、アヘン戦争以来のイギリスだといっても過言ではありませんし、日本の明治維

新も隣国のこの悲惨を察知した危機感によるものなのですから。しかし、この映画はけっして歴史を捉えたものなのではない。この映画における歴史は、紫禁城に育った子供の皇帝にそう見えるような歴史なのです。たぶん、この映画で見応えがあるのは、この宮廷生活でしょう。彼は、この宮廷から一歩も出られない。そして、彼は少しも歴史を体験できないのです。のちに、満州国の皇帝になったときも、結局「外部」に出られないのです。共産党の収容所においても、同じことです。

いわば、彼は「天使」であって、なにひとつ経験できないのです。経験できないということが、彼の苦痛です。しかし、彼は最後に「人間」になります。とすれば、この映画も「人間」になろうとする「天使」の話だといえないでしょうか。これは、私の勝手な解釈です。そして、ここまでいえば、なぜ私がこれらの映画について語りたいと思ったか推測できると思います。つまり、私は、自分自身が「天使」であるかのように感じたのです。

しかし、私が天使のような気がするといったのは、かつて「形式化」にとりつかれていたからです。形式的であること、それは、いわば「天使」たることです。これは、プラトニズムとは似て非なるものです。現代の形式主義は、プラトニズムのように永遠の同一性を志向しているのではなく、もはや同一性しかないという酷薄な認識なのですから。

もっと具体的にいいましょう。形式化は、情報社会において、われわれのほとんど日常的といっていいような生の条件です。われわれは、そこでありとあらゆるものを「知覚」したり「経験」した気になっているだけで、実は天使と同じくモノクロームの世界、すなわち自己同一性の世界に閉じこめられています。われわれは、ブラウン管を通して血塗れの死体を見慣れているが、いわば実際に血の色を見たことがないのです。つまり、シュミラクルというやつです。しかし、今や歴史そのものがシュミラクルなのです。

それはもはや歴史がなにひとつ質的に新しいものをもたらしえないのではないかという疑いとつながっ

ています。それがポスト・モダン、あるいはポスト・ヒストリーといわれている事柄です。たとえば、われわれはいまだにブルジョア革命が提出した理念をめぐって争っている。それを超えたつもりの「社会主義」は、それよりはるかに後退してしまう。すると、われわれは、ヘーゲルがいうように、ナポレオンとともに、世界史は終わったというべきなのでしょうか。むろん、そういいうるのは、ヘーゲルの後の不毛な「歴史」を経験してこざるをえなかったからです。つまり、時間において新たな超越が可能であるかのような幻影、いわば天使になろうとする人間たちの夢が終わったからです。

しかし、それを批判するとき、ヘーゲル主義の克服というのはまちがいです。ヘーゲルは、それを超えることが不可能な認識を語ったのですから。たとえば、初期マルクスを含む「青年ヘーゲル」派は、文字どおり、青年期のヘーゲルでしかない。彼に対するどんな批判も、もはや彼の円環的体系の一部でしかない。しかし、これに対する苛立ちこそ、深刻なものです。われわれは、もはや「天使」でしかありえないのですから。

たとえば、「構造主義」は、時間としての歴史を否定します。歴史は、たんに構造的なもの、同一的なもののなかに属するのです。そこでは、もちろん多様な変化があります。しかし、コーヒーカップとドーナツがどんなにちがって見えても、位相構造的に同一であるように、いかなる出来事もすでに同一性のなかにあるわけです。こういう認識は、べつに構造主義に限らないので、システム論一般がそうなのです。たぶん、このような考えは、カントにおいてあらわれています。構造主義がカント主義だといわれるのは、無理もありません。つまり、それは、カントにもどって、あらためてヘーゲル主義を批判することだったのです。ヘーゲルは、カントが同一性にとどまることを批判し、弁証法を導入しました。だが、カントを批判したヘーゲルも、結局同一性のなかに終わりを確認します。歴史がもはやなく、同一性の円環しかない地点に到達したのです。同様に、構造主義を批判するポスト構造主義も、また同一性の円環に到達する

のです。ニーチェ？　しかし、人びとがいっている「ニーチェ」は、実はヘーゲルではないでしょうか。それに対して、永劫回帰とは、あるいは反復（キルケゴール）とは、この同一性の円環から出ることではなかったでしょうか。ツァラトストラは、この同一性から、すなわち、山から、地上におりてくる、いいかえれば、人間になろうとする「天使」ではなかったでしょうか。「善悪の彼岸」において、初めて倫理性が問われるのではないでしょうか。

しかし、「天使」たることは不可欠であり、かつ不可避的であると、私はいいたいのです。われわれは、いちど徹底的に「形式的」となるのでないならば、「人間」にはなれないだろう、と。形式主義とは、人間主義の死です。だが、そこで初めて、新しい「人間」について語りうるかもしれません。有限で一回的なこの生を肯定しうるような「人間」について。それは、必ず元「天使」であったはずです。

ポスト・モダン、ポスト・ヒストリーが、われわれの生の条件だということを自覚した者は「天使」です。だが、そこで終わるのではなく、そこから始まるのです。誰もが、単独にそれを始めるほかありません。私はかつて、「意味という病」にとりつかれて時間的な方向に突き進んだひとりの男について書いたことがあります。その男は、前方においてなにかが実現されるという観念にとりつかれて行動してきたのですが、それが幻影であることを知ったとき、彼はもはやそのような言葉や意味と闘うことをやめます。しかし、彼は、そんなことなど知らずただ共同体の秩序によって生きているだけの人間に対して屈伏することは拒むのです。

降参などするものか。マルカムの小僧っ子の足下に額をすりつけ、下郎どもの悪口雑言にさいなまれてたまるものか。バーナムの森がダンシネインに動いてこようと、きさまが女から生まれた男でなかろうと、おれは最後まで戦うぞ。さあ、楯も捨てた。かかってこい、マクダフ。最後に「参った」

といった奴が地獄へ落ちるんだ。

彼は、魔女の言葉と闘うことをやめます。しかし、それは意味や根拠をもとめることをやめるだけです。それは、悲劇としての反復を拒絶することです。本当は、それから彼の闘争が、あるいは反復が始まるのです。この闘争に、「理由」や「動機」はありません。たんに自分を殺そうとする敵が眼前にいるからにすぎません。

一年前にこの対話を始めたときよりも、事態は鮮明になってきています。闘争はいたるところにあらわれてきています。そして、それは何に根ざし何に向けられているのかがはっきりしないがゆえに闘争なのです。さしあたって、われわれの闘争は、「天使」になろうとする「人間」たちに対するものです。つまり、外部を消去しようとする者たちです。彼らは天使ではけっしてありえないし、天使の無力も知らない、たんに人間を支配しようとする人間（魔女）でしかありません。彼らは、私に「動機」がないというでしょう。たしかに、私は「動機」をもっていない。だが、その代わり、「動機」が充たされることも失われることもありえないでしょう。元「天使」は、互いに元「天使」であることを識別できます。それは、もう人間的連帯とはちがった連帯です。そういう連帯の挨拶を、ひそかに送りたいと思います。

一九八八年三月三十日

柄谷行人



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.